



## 中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 悠人, 津田, 拓郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00010736">https://doi.org/10.32150/00010736</a>

# 中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて

森 悠人・津田 拓郎

## はじめに<sup>1</sup>

周知のとおり、2022年から高等学校の歴史教育においては、これまでの「世界史A」ないし「世界史B」を必修とする体制から、近現代史のみからなる「歴史総合」を必修とする形へと大転換がはかられることが決定している。注目すべきは、ダイジェスト的ではあれ前近代をも扱っていた「世界史A」と異なり、「歴史総合」においては前近代に関する記述が皆無となる点である<sup>2</sup>。すなわち、高等学校において新たに設けられる「世界史探究」を選択する者以外、前近代の外国史に触れる機会は、中学社会の歴史分野のみとなるのである。現状から考えて、「世界史探究」を履修する高校生の割合は相当程度低くなることが予想されるため、中学社会歴史分野における外国史教育が、日本人一般の前近代の外国史に関する知識のほとんどを担う状況が生じるのである。

だが、現行の学習指導要領における中学社会歴史分野は日本史中心の構成となっており、教科書においても前近代外国史の扱いは極めて小さなものに留まってい

---

<sup>1</sup> 本稿は2019年9月7日「第62回北海道教育大学史学会大会」にて、「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」という題で森が行った報告がもとになっている。本稿においては主として「はじめに」及び3を津田が、1と2を森が担当し、4と「おわりに」は森・津田双方が担当した。ただし、すべての部分について両著者が意見を出し合うとともに記述を相互に確認しあっているため、両者の執筆部分を厳密に区分することはできない。

<sup>2</sup> 「平成30年告示高等学校学習指導要領」を参照。歴史総合の教科書が前近代史を全く扱わないものになるであろうことについては、君島和彦「新科目『歴史総合』とどう向き合うか」、『じっしやう地歴・公民資料』86、2018年、115頁。

る<sup>3</sup>。こうしたこともあってか、これまでの中学歴史分野の研究において、前近代外国史を扱う頁に大きな注目が集まることは少なかった。特に前近代の西洋史は、日本史全体の流れと直接的な関わりがないためか、教科書の中でも「浮いた」存在となっており、高校世界史の予告編のように捉えられがちで、具体的な授業開発研究の対象とされることもほとんどなかったように思われる。例えば、黨武彦他「中学校歴史教育における世界史的視点からの授業開発」<sup>4</sup>では、「世界史的視点」が表題に掲げられているにもかかわらず、前近代西洋史は完全に視野の外に置かれている。だが、「歴史総合」必修化により、この教科書にして10頁程度にすぎない前近代西洋史の単元の性質は「予告編」から「本編」へと変貌するのである。われわれは今、中学歴史分野の中で与えられた極めて限られた時間の中で、前近代西洋史そして世界史をどのように教えるべきかという問題を具体的な授業実践のレベルで考えるという、非常に困難な課題を突きつけられているのである。さらに問題なのは、こうした課題が存在するという自体、ほとんどの学者（歴史学者・教育学者）や現場の教員に認識されていないという事実である<sup>5</sup>。

このような問題意識から、本稿では、中学校歴史教科書の西洋史分野の記述における中世から近世への移り変わりの扱いを、特にイタリア・ルネサンスに対する記述を中心に考察し、学校教育における前近代世界史教育のあり方について再考するための手がかりを得ることを試みる。教科書の比較・検討において、特にイタリア・ルネサンスの記述に着目するのは、後述するように、前近代の世界史においてイタリア・ルネサンスが時代の変わり目として重要視されてきた過去があるためである。時代の転換点が教科書中でどのように扱われているのかを分析することで、現状の中学における前近代世界史教育において生徒は何を学ぶことができているのか（また、何を学ぶことができているのか）が明らかになるであろう。こうした意

<sup>3</sup> 「平成29年告示中学校学習指導要領」をみる限り、この状況は2020年採択予定の新たな中学歴史教科書でも大きく変わることはなさそうである。

<sup>4</sup> 『熊本大学教育実践研究』36、2019年、173-180頁。

64 <sup>5</sup> 例えば、梅津正美「高校『歴史総合』と中学校『歴史分野』の円滑な接続を図る授業校生の手だて」（『特集：世界と日本が融合する『歴史総合』授業デザイン』）、『社会科教育 教育科学』717-1、2019年、14-17頁は、高等学校での「歴史総合」必修化を背景とした中学校の歴史教育見直しを論じるものであるが、「中学校社会科歴史分野における前近代世界史部分の重要性増大」という視点は全く欠けている。

味で本稿の分析は、中学校社会の歴史分野における前近代世界史部分に関する将来的な授業開発のための準備作業として位置付けられるものである。

本稿が扱う問題の先行研究としては、「世界史的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」<sup>6</sup>に含まれる仲田公輔「Ⅲ、中学校歴史教科書における中世ヨーロッパ」がある。これは、2014年度に検定を終えた中学歴史分野の教科書<sup>7</sup>の検討を行い、義務教育段階での世界史教育の現状と問題点を指摘しているものである。この論文中で仲田は、教科書が時間的・内容的制約を受けることを念頭に置きながらも、「限られた紙面を用いて、いかにエッセンスを減じずに伝えていくのかという工夫がなされている」<sup>8</sup>点に着目し、「中学歴史教科書記述の傾向を、最新の研究動向と対照させつつ比較・検討する」作業を行っている。仲田の分析は、専門家らしく最新の研究動向を踏まえたうえで全社の教科書記述を分析する密度の濃いものであり、大いに参考になる知見を多数含んでいる。他方で、本稿は教育現場での実践レベルの視点で教科書の内容を考察するものであるため、仲田論文とはやや視点を異にしている。こうした視点の違いから、歴史学者としての立場で考察が行われている仲田の結論は本稿のそれとは異なるものとなるだろう<sup>9</sup>。なお、「歴史総合」必修化に際して、「歴史総合」をタイトルに冠した論考が近年多数あらわれているが、管見の限り「歴史総合」必修化に伴って、中学校歴史分野における前近代世界史教育の重要性が増大するという問題に正面から取り組む仕事は一切見つからなかった。

以下本稿では、実際の授業の現場を念頭に置きながら中学校歴史教科書におけるルネサンスに関わる記述を中心に分析を行い、その批判的検討を進めるとともに、

---

<sup>6</sup> 山田耕太・梅村尚樹・仲田公輔・須田牧子「世界史的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」『歴史学研究』956、2017年、20-29頁。

<sup>7</sup> 東京書籍『新編新しい社会 歴史』、教育出版『中学社会歴史 未来をひらく』、清水書院『中学歴史 日本の歴史と世界の歴史』、帝国書院『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』、日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、自由社『新版 新しい歴史教科書』、育鵬社『新編 新しい日本の歴史』、学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』の8冊を対象としている。

<sup>8</sup> 山田耕太・梅村尚樹・仲田公輔・須田牧子「世界史的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」、20頁。

<sup>9</sup> 仲田の結論は「通時的には古代・近世と、共時的にはイスラームと対置されてきた西洋中世を相対化する視点は、今後一層取り入れられるべきではないだろうか」というものとなっており、さらに最新の知見を踏まえた記述を取り込むことで、「西洋中世の相対化」を進めべきだというものである（同26-27頁）。

教科書使用上の注意点を指摘することを試みる。検討の対象とした教科書は、上述の先行研究と同じく日本文教出版『中学社会 歴史的分野』、教育出版『中学社会歴史 未来をひらく』、東京書籍『新編新しい社会 歴史』、清水書院『中学歴史 日本の歴史と世界』、帝国書院『社会科 中学生の歴史』、育鵬社『新編新しい日本の歴史』、自由社『新版新しい歴史教科書』、学び舎『ともに学ぶ人間の歴史』の8冊である<sup>10</sup>。

分析結果から、現行の中学歴史教科書における前近代ヨーロッパ史の記述は、限られた授業時間や紙面の制限から、大きな誤解を招きやすいものとなっていることが見えてきた。現在のカリキュラムであれば、高等学校進学者は「世界史A」ないし「世界史B」の授業を通じてそうした誤解を解消することが可能であるが、2022年度以降、こうした機会はほとんどの生徒から奪われることになる。

## 1 ルネサンス理解の変遷

教科書の分析を行う前に、分析の中心となるルネサンスについての学界における理解の変遷をまとめておきたい。ルネサンス研究が本格化した19世紀から現在に至るまでに、ルネサンス理解には様々な変化が生じた。本稿では、(1)伝統的なルネサンスイメージ、(2)ブルクハルトへの批判、(3)現在の理解、と大きく3段階に分けてルネサンス概念の変遷を追っていく。なおここではルネサンス理解についての研究史を網羅的に整理する作業は行わず、主として邦語で読める情報をもとに、研究史及び現在のルネサンス理解の概要をまとめるにとどめる。

### (1) 伝統的なルネサンスイメージ

一般にルネサンスというと、芸術が花開いた、きらびやかな世界を思い浮かべる人も少なくないだろう。このようなイメージには、19世紀に確立された歴史観が影響している。19世紀に確立されたルネサンス観の一つに、中世と比較させる形でルネサンスのきらびやかさを称えるものが存在した。それはヤーコブ・ブルクハルトによって書かれた『イタリア・ルネサンスの文化』によるものであり、彼の著書が

<sup>10</sup> ただし、学び舎のみ2015年、その他は2016年に刊行されたものを用いている。内容的には2014年度検定版から大きな変化はみられなかった。

現在でもルネサンス研究の根幹をなしているのは、ルネサンスに関わる文書を読むときに必ずといっていいほどその名前が挙がることから明白である。

ブルクハルトは、「個人主義」と「近代性」の大きく2点からルネサンスを定義づけたことで有名である。彼は、個人という自覚が芽生えたのがルネサンスであり、中世においては宗教信仰による意識が支配的だったとして、中世との断絶を強調している<sup>11</sup>。さらにブルクハルトは、中世において支配的であった「地上の事物＝無価値」という宗教的なものの見方について、ルネサンスがこれを克服して個人主義化していくという点に近代性を見出している<sup>12</sup>。

## (2) ブルクハルトへの批判

中世とルネサンスの間に壁を設けるようなルネサンス観は20世紀にはいり、次第に受け入れられないものとなってくる。ここでは、ブルクハルトのルネサンス観への批判について、大きく3点にまとめて紹介する。

1つ目は、イタリアを特別視したことへの批判である。ブルクハルトは、ルネサンス期のイタリアに比類のない飛躍を認めたため、意識してイタリアを取り上げていた。確かに、ルネサンスが華々しく開花したのはイタリアであったが、15世紀の文化活動においてイタリアのみが優位にあったわけではない。ヨハン・ホイジンガは、ブルクハルトのルネサンス観において北ヨーロッパの文化と社会が見捨てられ

---

<sup>11</sup> ブルクハルト(柴田治三郎訳)『イタリア・ルネサンスの文化(上)』中央公論社、1974年、141-142頁。また、ブルクハルトは「中世においては、意識の両面—外界に向かう面と人間自身の内部に向かう面—は、一つの共通のヴェールの下で夢みているか、半ば目覚めている状態であった。そのヴェールは、信仰と小児の偏執と妄想から織りなされていた」とし、そのヴェールが取り払われ、はじめて客観的なものの見方があらわれるのはイタリアであるという。彼は、続けて「人間は自己を、国民、党派、団体、家族として、あるいは何らかの一般的なものの形でだけ、認識していた」とし、自己を個人として認識するのは人間が精神的な個人となった時であるといい、これもイタリアで初めて出現したとしている。ブルクハルトの個人主義については141頁から始まる「Ⅱ 個人の発展」にまとめられている。

<sup>12</sup> ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化(上)』141頁。ブルクハルトは「イタリア人が早くから近代的人間として形成された唯一とはいえないにしても最有力な理由は、これらの国家、共和国並びに専制国家の性質の中にある」とし、15世紀のイタリアの政治状況の中でこそ、近代的と呼べるような個性が生まれたと主張している。

ていることを指摘し<sup>13</sup>、15世紀のフランドル画家ヤン・ファン・エイクを取り上げた。また、ホイジンガの著書の翻訳を行った里見元一郎は、アルプス以北の西欧のルネサンスを積極的に取り扱い<sup>14</sup>、イタリアとは異なった形ではあったもののアルプス以北でもルネサンスの動きがあったことを述べ、さらにイギリスやスペインにおけるルネサンスの存在も強調している。一方、森田鉄郎によると、美術史家クラージョはその専門的分野の視点<sup>15</sup>から、むしろ、フランス＝ゴシック芸術からのルネサンス成立を説いているという。

2つ目に、中世とルネサンスの時代区分についての問題がある。ブルクハルトは、中世とルネサンスの境界をあまりにはっきりとさせたため、中世を暗黒時代として捉える見方が20世紀まで主流であった。しかし、20世紀にはいるとルネサンスは中世から連続しているという主張が出てきた。それは、19世紀からの諸科学の発展、人文主義史学の影響による民族の歴史への開眼の始まり、また、ゲルマン人を主たる担い手とする中世文化の再認識などの要因から、ルネサンス根掘り論者<sup>16</sup>と呼ばれる一群の人々による、ルネサンスの根源を中世文化の展開のうちに探る動きであった<sup>17</sup>。彼らは、中世とルネサンスの間の連続性を強調しており、ルネサンス文化と呼ばれてきたものが、古代から中世、中世からルネサンスという連続性の中で漸進的に形成されたと主張しているのである。

3つ目に、ルネサンスを近代の始まりとする主張に対する批判がある。トレルチ

---

<sup>13</sup> ヨハン・ホイジンガ（里見元一郎訳）『文化史の問題』東海大学出版会、1965年、181-240頁。209頁において、フランドル画家たちを取り上げ、「ヤン・ファン・アイクの驚くべきほど克明なリアリズム、これこそ、ある人々にとっては真のルネサンス精神を示す最も代表的な事例だった」としている。

<sup>14</sup> 里見元一郎「九 西欧ルネサンス」『中世史講座第10巻 中世の芸術と文学』学生社、1994年、178頁-204頁。

<sup>15</sup> 森田鉄郎『ルネサンス期イタリア社会』吉川弘文館、1967年、26頁。森田は「フランスの美術史家クラージョは、ルネサンス美術の基本的要因を自然主義と現実主義とに置きつつ、それがまず14世紀の北フランスにおいてフランドル派絵画の影響を汲んで形成されたのち、15世紀にイタリアに伝播してイタリア＝ルネサンスとなったとし、むしろフランス＝ゴシック芸術家らの成立を説いた」としている。

<sup>16</sup> この表現はホイジンガ『文化史の問題』、204頁や森田鉄郎『ルネサンス期イタリア社会』、21頁で用いられる。

<sup>17</sup> 森田鉄郎『ルネサンス期イタリア社会』18-32頁。

は、ブルクハルト以来みられたルネサンスと宗教改革が内的に関連しつつ中世を終わらせたという考えを批判し、社会学的視点からルネサンスと宗教改革は対立した動きであるという点を強調して、宗教改革こそ社会を変える力を持っていたと主張した<sup>18</sup>。彼が言わんとしたことは近代のヨーロッパを準備したのは、ルネサンスではなく宗教改革の精神による社会的生産力だということであった<sup>19</sup>。

### (3) 現在のルネサンス理解と時代区分のありかた

これまでみてきたように、比較的早くからブルクハルトの学説は様々な角度から批判されてきたわけだが、では現在の学界におけるルネサンス理解、特に時代区分の指標としてのルネサンス理解はいかなる形のものなのだろうか。

日本を代表する西洋史家である樺山紘一は、中公「世界の歴史」シリーズの『ルネサンスと地中海』において、ルネサンスを季節に当てはめて叙述している<sup>20</sup>。「春（始点）」を1370年代～1450年代、「夏」を1350年代、その後のルネサンスの拡散を「初秋」、国民文化として自立していった時期を「秋」とみなしているのである。樺山は、ブルクハルトへの批判が存在することにも触れつつも、依然として伝統的な「断絶史観」に近い歴史像を提示していると考えて良いだろう。また、ルネサンス文化の専門家である根占猷一は、15、16世紀を中心とするイタリア・ルネサンスは、地理上の発見や世界システム論などと深く関わりがあるとして、その重要性を再度強調し<sup>21</sup>、カロリングルネサンスや12世紀ルネサンスの存在からイタリア・ルネサンスの意義を過小評価するような史観は、ルネサンスの意義を「古典復興」のみに限定するものであるとして批判している。ブルクハルト的ルネサンス理解が多方面から批判されてきたにもかかわらず、中世からの転換点としてのイタリア・ルネサンスの意義は現在の研究においても一定程度強調され続けているのである<sup>22</sup>。

<sup>18</sup> エルンスト・トレルチ（内田芳名訳）『ルネサンスと宗教改革』岩波書店、1959年、13頁。

<sup>19</sup> 近藤和彦「近世ヨーロッパ」『岩波講座世界歴史16 主権国家と啓蒙』岩波書店、1999年、15-17頁。

<sup>20</sup> 樺山紘一『世界の歴史16 ルネサンスと地中海』中央公論社、1996年。

<sup>21</sup> 根占猷一「ルネサンス・ヒューマニズムと近代—特にイタリアとドイツの視点から—」『19世紀学研究』(1)、2014年、56-73頁。

<sup>22</sup> その他、邦語で読める最新のルネサンス研究としては、ブルクハルト批判の歴史をたどりつつ、中世との連続性や「ルネサンス」研究の多様化を強調する、ピーター・バークのも



また、亀長洋子は、ピーター・パーク『ルネサンス』の訳者解説において、歴史研究においては時代区分用語として「ルネサンス」が用いられなくなっていることを指摘しつつも、美術史や建築史、哲学史等では「ルネサンス」は今でも抵抗なく時代区分を示す語として用いられていると指摘する<sup>23</sup>。徳橋曜も「文学史や美術史、あるいは建築史の世界」では「ルネサンス」が特定の様式・文化傾向を示すものとして使われ続けていると指摘するとともに、歴史学においては「ルネサンス」に関する共通理解が存在しないことを強調し、さらには、「『ルネサンス』はあいまいなまま、一つの文化・思想動向とも一つの時代ともとらえられているようである」とも述べている<sup>24</sup>。

実際の所、歴史学の分野においてもルネサンスとともに中世が終わるとみなす時代区分は、様々な形の留保をつけられながらも、多くの場所で残り続けているように思える。『岩波講座世界歴史』においてルネサンスに言及するのは、「中世盛期・末期」を扱う第8巻『ヨーロッパの成長 11-15世紀』ではなく、「近世」を扱う第16巻『主権国家と啓蒙 16-18世紀』であるし、河出書房や中公文庫における「世界の歴史」シリーズにおいても「ルネサンス」の巻は「中世」の巻とは独立して用意されているのである。

他方で、ジェリー・プロトンは、ヨーロッパの時代区分に関して、「ルネサンス」ではなく「近代前期」という表現を使用する人たちの存在をあげている<sup>25</sup>。「近代前期」という概念の利点は、この時代をルネサンスのみに代表させる立場から距離をとることで、それまでルネサンスと関係づけて研究されることのなかった話題やテーマに取り込むことが可能になるという点に求められている。ただし、こうした立場の者たちもまた、15世紀から17世紀が近代世界に多大な影響を与えた時代であるという点を否定するものではないため、この時期が時代の転換点であるという考え方は消えていない。

現在の日本の学界においては、プロトン（正確に言うとプロトンの翻訳者）が「近

---

のがある。ピーター・パーク（森田義之・柴野均訳）『新版イタリア・ルネサンスの文化と社会』岩波書店、2000年；同（亀長洋子訳）『ルネサンス』岩波書店、2005年。

<sup>23</sup> ピーター・パーク『ルネサンス』、105頁。

<sup>24</sup> 徳橋曜「中世とルネサンス－継続/断絶」『西洋中世研究』6、2014年、2-3頁。

<sup>25</sup> ジェリー・プロトン（高山芳樹訳）『はじめてわかるルネサンス』筑摩書房、2013年、26-44頁。

代前期」として提示した時代は「近世」ないし「初期近代」と称されるのが通例であり、主としてフランス革命や神聖ローマ帝国崩壊以降の時期を指す「近代」と区別する用法が一般的である<sup>26</sup>。また、中世と近世の境目については、一つのできごとや一つの年号に代表させるのではなく、15-16世紀頃に様々な分野で生じた諸変化を通じて時代が移り変わっていくという理解が通説となっていると言って良い<sup>27</sup>。現在の歴史学界においてルネサンスのみが中世を終わらせたという考え方が示されることは稀であるが、この時期に生じた様々な分野における変化の一つとしてルネサンスを位置づける歴史観は現在でも一定程度残り続けているものと思われる。

## 2 教科書分析

中学の歴史教科書において、ルネサンスはどのように扱われているのだろうか。表1は、「はじめに」であげた8社の教科書について中世とルネサンス、時代区分に関する記述をまとめたものである。ルネサンスを取り上げている教科書の多くに共通する要素としては、1) イタリアのみの現象とせず、「イタリアからヨーロッパに広まった」という叙述がなされていること、2) 「人間らしさ」や「自由」といった概念でルネサンス精神を説明していること、3) 古代ギリシア・ローマ文化の復興という要素に言及していること、4) 東方の影響を強調していること（ただし「十字軍」、「貿易」、「交流」など各社ごとに強調点はやや異なっている）<sup>28</sup>を指摘できる。これらは伝統的なルネサンス理解をベースにブルクハルトへの批判や近年の通説を

<sup>26</sup> 近藤和彦『近世ヨーロッパ』山川出版社、2018年、1頁。Early modernの訳語を「近世」とすべきか「初期近代」とすべきかに関する議論には本稿は立ち入らない。

<sup>27</sup> 近藤和彦『近世ヨーロッパ』、9頁。

<sup>28</sup> イタリア・ルネサンスに東方からの影響をみる見方は学界ではすでに通説的な位置づけを得ているといってよい。新谷英治「2オスマン朝とヨーロッパ」、歴史学研究会『講座世界史1世界史とは何か』東京大学出版会、1995年、47-73頁；樺山紘一『世界の歴史16 ルネサンスと地中海』、25-32頁、130-138頁、275-276頁；プロトン『はじめてわかるルネサンス』、45-78頁。中学歴史教科書におけるこうした記述及びその問題点については山田耕太・梅村尚樹・仲田公輔・須田牧子「世界的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」の仲田公輔執筆部分に詳しい。

表1 中学校歴史教科書における中世とルネサンスの記述

期間・場所	中世との関係	各時代の三美神の姿（とポッティチェリ「春」の提示の仕方	ルネサンス精神の説明	ルネサンスの背景（下欄は著者による）	西洋史の時代区分（巻末年表）
日本 文芸 教	14世紀ごろからヨーロッパ で。	タイトルにて「中世から近 世へ」と記述（ただし日本 史部分も含めた章全体のタ イトル）。	「中世の三美神」「ポッティチェリ」の「春」上 「どんなところが違うかな。なぜこのよう な違いが生まれたのだろうか。」	ルネサンスの影響から、イスラム 十字軍の影響から、イスラム 文化や古代ペリシヤ、ローマ の文化への関心の高まりによ る。	なし
教育出版	14世紀ごろ、16世紀にかけ てヨーロッパ各地に広まっ た。	タイトルにて「中世からの 脚韻」と記述。	「中世の三美神」の絵とポッティチェリ「春」上 「春」を並べ、それぞれに「古代」「中世」 「ルネサンス」と付記。「それまでの絵とは、 どうちがうのかな。」	ビザンツ帝国やイスラム世界 との貿易で栄えたイタリア都 市による。	あり
東京書籍	14世紀から16世紀にかけて イタリアからヨーロッパ 各地に広がった。	ローマ帝国分裂以降の「中 世」「ルネサンス」と「ルネサ ンス」。「宗教改革」を見開 きで記述。	「春」のみ掲載。「ルネサンスでは、教会 の支配や考え方にとらわれない、人間らし い生き方や人間の美しさが追求された。」	東方との交流が盛んになった ため、西ヨーロッパには、忘 れられていた古代ペリシヤ、 ローマの文化が持ち込まれた ことによる。	あり
清水 書院	14世紀ごろからイタリアで はじまった。16世紀までに はヨーロッパ各地に広がっ た。	ローマ帝国分裂から、中世 宗教改革を見開きで記述。 「中世」と「ルネサンス」	「春」のキャプションで説 明。	（記載なし）	あり
帝国書院	14世紀、16世紀に最盛期を 迎えた。	イスラムの発展から、十字 軍、ルネサンス、宗教改革 を見開きで記述。本文中で は「中世」に言及しないが、 「図版」のキャプションで は「中世」と「ルネサンス」 の断絶を強調。	「人間の個性や自由を表現 しようとした」	貿易で富を蓄え、また、イス ラム文化の影響をいちはやく 受けなことで学問や芸術が盛 んになったイタリアからの始 まりによる。	なし
育勲 社	14、15世紀ごろイタリアを 中心に「イタリアからヨー ロッパ各地へと広まった。	ルネサンスと宗教改革を見 開きで記述。中世ヨーロッ パの扱いなし。	「キリスト教の教えにしば られずに人間性を表現する」	イスラムの文化からの影響に よる。	あり（ただし「近 世」がなく「中世」 の次は「近代」）
自 白 社	ルネサンスに関する記述な し。				なし
学 び 舎	年表中の1299年～1399年の 間に「イタリアでルネサ ンスが始まる（～16世紀）」 と記述。		「神中心から人間中心への 文学・美術・学問の革新運 動」（年表中の記述）		なし

取り入れた記述と評価してよいだろう。他方で、ルネサンスと中世の関係性や時代区分についての取り扱いに関しては、教科書ごとにやや異なる内容がみられ、多くの場合生徒に誤解を与えかねない内容となっていた。以下では、特に5社の教科書について、構成、資料、叙述の3点から分析・考察を行っていく<sup>29</sup>。

まず取り上げるのは、日本文教出版の教科書である<sup>30</sup>。第一に注目すべき点としては、タイトルに「中世から近世へ」と書かれてあることがあげられる。これは章を通してのタイトルであるが、この見開きで叙述されている内容もヨーロッパの中近世にあたるため、この点に矛盾はない。構成は左頁に「イスラム教の世界の発展」があり、左頁下段にイスラムの学問や科学などの文化についてのコラムが置かれる。右頁には「アジアに向かうキリスト教徒」として、ヨーロッパの中世からルネサンス、宗教改革、反宗教改革（イエズス会）が一つの節の中で説明されている。資料は、イスラム世界とキリスト世界の勢力図、十字軍兵士の想像図、イスラム商人の船の絵、イスラム教徒の天文学、サン＝ピエトロ大聖堂、免罪符の販売を風刺した絵、ルターの肖像画、レオナルド＝ダ＝ヴィンチ「モナリザ」、ミケランジェロ「ダビデ像」である。資料は、イスラム教徒の天文学までが左頁に載せられ、記述に対応しているといえる。しかし、右頁に載せられている資料のすべてがルネサンス以降のものであり、中世に関する資料は一つもない。こうした構成は中世へのイメージを喚起しないのみならず、ルネサンスの資料から中世ヨーロッパのイメージが形作られる危険性も孕んでいる。この点については、教師が注意深く解説していかなければならない。記述内容は、イスラム教の世界とキリスト教の世界の交わりを重視したものとなっており、十字軍とルネサンスを結びつける形で叙述がなされている。なお、この部分で、中世と近世の間の時代区分に関わる記述が全く見当たらず、

<sup>29</sup> 自由社と学び舎の教科書は中世ヨーロッパ及びルネサンスを全く扱っていないため分析の対象外とした。育鵬社の教科書は通常の章立てと独立した「このころ世界は」において、「ルネサンスと宗教改革」を2頁にわたって取り上げている。この教科書は中世ヨーロッパには全く言及しておらず、この意味ではもっとも極端な断絶史観を打ち出しているかのようにも思えるが、「ルネサンスと宗教改革」の部分において「中世」や「近世」といった時代名称は一切あられわれない。また、巻末の年表における「西洋」の時代区分において「近世」はあられわらず、「中世」に続く時代は「近代」とされており、17世紀中ごろからフランス革命までが「中世」と「近代」の境目となっている。

<sup>30</sup> 『中学社会 歴史的分野』日本文教出版、100-101頁。

章全体のタイトル以外では「中世」や「近世」という時代名称が一切言及されないことも指摘しておきたい。教科書末尾の年表には「時代区分」として「古代」「中世」「近世」などの時期が書かれているが、それらは日本史における時代区分であり、外国史部分に対応したものではない。

次に取り上げるのは、教育出版の教科書である<sup>31</sup>。この教科書は本稿の分析対象となる時代の記述に4頁をあてているため、他社の教科書よりもゆとりを持った構成になっている。第一に注目すべき点は、「ルネサンスと宗教改革」を扱う見開き2頁のタイトルが「中世からの脱却」とされている点である。この教科書では、「中世からの脱却」の直前に、「中世のヨーロッパ世界とイスラム世界」を扱う「教会と『コーラン』の教え」<sup>32</sup>を配置していて、中世とルネサンスを明確に断絶史観によって捉えていることが読み取れる。よって本教科書は依然として伝統的なルネサンス観を残したものとみなすことができる。構成としては、「中世からの脱却」の左頁に「ルネサンス」があり、左頁下部から「宗教改革」が始まり、右頁中段まで続き、右頁下段に「広がるイスラム世界」が配置され、それぞれタイトル通りの説明がなされている。資料は、左頁に中世の三美神、ボッティチェリの「春」、羅針盤の写真、右頁にレオナルド＝ダ＝ヴィンチの「モナ＝リザ」、ミケランジェロの「ダビデ」、宗教改革の宣伝用に印刷されたパンフレット、アヤソフィア大聖堂の写真が載せられている。資料は、記述内容と合致した位置に配置されている。ただし、中世の三美神とボッティチェリの「春」の部分には、古代の三美神が欠けており、生徒はルネサンスにおける古代の復興という要素をイメージすることができない。中世からの断絶を強調するのであればなおさら、他社と同じように古代の三美神の絵も追加する方が良いのではないかと思われる。また、宗教改革の宣伝用に印刷された絵という資料においては、キャプションに記載されている活版印刷の普及という要素を宗教改革と絡めて説明することが必要となる。現場の教師には本文に一切説明のない活版印刷についても生徒に補足説明することが求められているのである。この教科書の資料の配置に関しては、中世とルネサンス以降を混同させるようなつくりにはなっていないものの、資料自体の取り扱いや授業づくりには教師の力量がある程

<sup>31</sup> 『中学社会歴史 未来をひらく』教育出版、88-91頁。

<sup>32</sup> 「教会と『コーラン』の教え」の見開き2頁では、「中世のヨーロッパとキリスト教」、「イスラム世界の発展」、「十字軍」が記述されている。

度反映される仕組みになっているとみなせる。記述内容としては、貿易によるイスラム世界やビザンツ帝国との接触をルネサンスの契機として位置づけており、ルネサンスと宗教改革に続くイスラム世界の拡大を扱う部分でオスマン帝国への言及もみられる。教科書末尾の年表では14世紀中ごろあたりに「ルネサンスが始まる」という記載がある。また、日本史の時代区分とは別に「西洋」の時代区分の欄が設けられていて、中世と近世の境目が14世紀中ごろから16世紀中ごろまでであることが示されている。この点は、ルネサンスと宗教改革を扱う部分を「中世からの脱却」としている本文の構成に対応している。ただし本文や見出しに「近世」が一切あらわれない点は、他社の教科書と共通している。

次に取り上げるのは、東京書籍の教科書である<sup>33</sup>。中世ヨーロッパとルネサンスを扱う部分である「1キリスト教世界とルネサンス」は、第4章「近世の日本」の中の第1節「ヨーロッパ人の出会いと全国統一」の冒頭に置かれている。構成としては左頁に「中世ヨーロッパ」を掲げ、十字軍による中世ヨーロッパとイスラム世界との接触についての叙述がなされ、右頁前半に「ルネサンス」、右頁後半に「宗教改革」が配置され、それぞれタイトル通りの叙述がなされている。資料としては、左頁に「ギリシャ・ローマ神話の中の三美神」、「中世の三美神」、ボッティチェリの「春」（三美神のみを拡大して掲載）、「イスラム教の国々で発達した科学」の絵、右頁に「サン・ピエトロ大聖堂」、「トルコのアヤ・ソフィア大聖堂」、「十字軍の遠征」の地図、「レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』」、「ミケランジェロの『ダビデ』」、ルターとカルバンの肖像画が載せられている。資料の配置としては、「中世ヨーロッパ」を扱う左頁に古代やルネサンスの絵画、イスラム世界の図像を載せ、「ルネサンス」や「宗教改革」を扱う右頁に「十字軍の遠征」を載せるなど、記述内容と資料が合致しない版面になっている。また、記述内容としては、中世から宗教改革までが一連の流れのように叙述されている。たしかに節のタイトルにおいては、中世とルネサンスをはっきりと区別されており、後述するようにボッティチェリ「春」の提示の仕方でも断絶史観のように見えるが、記述内容を追って見てみると、一転して連続史観的な要素が強調されているように思える<sup>34</sup>。教科書本文に「近世」

<sup>33</sup> 『新編新しい社会 歴史』東京書籍、90-101頁。

<sup>34</sup> 「ルネサンス」部分冒頭は「こうして東方との交流が盛んになったため…」となっており、中世ヨーロッパの展開を受けてルネサンスが生じたという流れが強調されている。

という語が一切あらわれないことや、はじめの節が「中世ヨーロッパ」という見出しとなっていることもあり、この見開き2頁全体が「中世ヨーロッパ」を扱っていると生徒が受け取る可能性もあろう。教師による補足説明がない場合、「ルネサンス」のみならず、「宗教改革」も、またサン・ピエトロ大聖堂やアヤ・ソフィア大聖堂、モナ・リザやダビデ像などがすべて中世ヨーロッパの産物であると誤解してしまうことすら危惧される。ただし、教科書末尾の年表には、「欧米」の時代区分の欄が設けられており、15世紀中頃から16世紀中頃あたりまでが「中世」と「近世」の境目とされている。この年表では16世紀前半あたりに「ルネサンスが全ヨーロッパに広まる」という記述があり、そこには「近世」と同じ色がつけられており<sup>35</sup>、ルネサンスは中世から近世への過渡期のような取り扱いとなっているようである。したがって、節のタイトルと三美神の絵画（断絶説的）、記述内容（連続説的）、年表（過渡期としてのルネサンス）それぞれがやや異なった時代区分を打ち出すものとなっているようにも思える。これは時代の変わり目としてルネサンスをどう評価するかに関する学界の議論を誠実に、そしてバランスよく踏まえた結果のようにも思えるが、中学の社会科教師や生徒が中世やルネサンスの時代区分、特に古典的学説とその見直しの動きにまで注意を払えるほどの前提知識を備えていない場合、現場に混乱をもたらす恐れもあろう。

4つ目に取り上げるのは、帝国書院の教科書である<sup>36</sup>。見開き部分全体のタイトルは「イスラムの拡大とヨーロッパ」となっており、イスラム勢力の拡大からヨーロッパの変化を説明するものとなっている。構成は、左頁が「イスラム教の発展と十字軍」、左頁下段から右頁中段までが「新しい文化と芸術」、右頁下段に「信仰の見直し」が配置されている。ここでは、単元のタイトルや節のタイトルにおいて、中世やルネサンスといった時代名称が用いられていないことが特徴として指摘できる（本文中では「ルネサンス」の語が用いられている）。資料については、左頁に「イスラムの国での研究のようす」の絵、「イスラム教の広まり（7～15世紀）」（地図）、「750～1600年ごろのできごと」（年表）、右頁に「古代ローマの三美神」、「中世の

<sup>35</sup> なお、「ルネサンスの始まり」は年表には記載されていない。13世紀後半あたりの「北イタリアの都市が栄える」や15世紀初め頃の「グーテンベルクが活版印刷術を発明する」には「中世」と同じ色が塗られている。

<sup>36</sup> 『社会科 中学生の歴史』帝国書院、86-87頁。

三美神」、「ルネサンスのころの三美神」、「教会での資金集めのようす」の絵、ルターの肖像画が載せられている。資料の配置は、おおむね記述に即したものとなっている。比較のために古代や中世の三美神をルネサンスに関係する資料と一緒に右頁に載せていることには多少注意する必要があるが、「ルネサンスのころの三美神」にはキャプションがついており、中世とルネサンスを対比的に扱う説明があるため、両者の時代の違いを区別することは難しくはない。各節の叙述内容もタイトルに即したものであり、東京書籍と比べると記述としては節ごとにそれぞれ完結していて、やや断絶史観よりのようにも見える。ただし、時代区分に関する記述は、「ルネサンスのころの三美神」のキャプションで出てくるのみで本文にはあられなく、「中世」や「近世」といった時代名称も本文には一切あられなくない。基本的に時代区分には言及せず、節の間の接続に関しては教師ごとの工夫にゆだねるという方針なのかもしれないが、古代・中世・ルネサンスの三美神の比較において明確な時代区分、それも明確に断絶史観的時代区分が打ち出されている以上、教師が授業の中で時代区分や時代名称について補足説明を行う必要が生まれてしまっている。また、ここは教科書全体の中では日本史における近世を扱う「第4部」の初めの単元に当たり、左頁上に「第4部 近世」という大見出しがつけられてしまっていて、この点も生徒を混乱させかねない大きな問題であろう（三美神のキャプションにおいては「古代」「中世」のみが言及され、「近世」はキャプションにも本文にもあられなくない）。巻末の年表には日本史における時代区分のみが記載されている。

最後に取り上げるのは、清水書院の教科書<sup>37</sup>である。はじめに注目するのはこの部分全体のタイトル「ヨーロッパ世界の形成」についてである。タイトル通り、この見開きの頁ではイスラムに関する記述がほとんどなく、キリスト教の動向を中心としたヨーロッパ前近代史となっているのが特徴である。現在の研究動向を踏まえるなら、ヨーロッパ前近代史を考えるうえでイスラム世界を無視するという方針にはかなり物足りなさを感じてしまう。構成としては、左頁後段まで「ヨーロッパ世界の成立」としてローマ帝国の東西分裂から「中世ヨーロッパの特長が形成された」とされる9世紀ごろまでが記述され、左頁後段から右頁中段までで「ローマ教会と中世ヨーロッパ」として中世ヨーロッパの社会・経済と十字軍についてが説明され

<sup>37</sup>『中学歴史 日本の歴史と世界の歴史』清水書院、90-91頁。



なされ、右頁後段に「ローマ教会の対応」として反宗教改革についてが書かれている。資料としては、左頁に「中世ヨーロッパ」の地図、「中世ヨーロッパの農民の生活」の絵、「サン・ピエトロ大聖堂」、右頁にポッティチェリの「春」、ルターの肖像画が載せられている。資料の配置としては、中世に関する記述がなされている左頁に、現在の姿の「サンピエトロ大聖堂」が載せられていることに注意しなければならない。さらに、本文の叙述では、「ヨーロッパ世界の成立」に、「西ヨーロッパに成立したこの文明圏をローマ・カトリック世界とよび、ギリシャ・ローマの古代を引き継ぐ中世ヨーロッパの特徴が形成された」とあるのに対して、「ルネサンスと宗教改革」の章では「14世紀ころから、古代のギリシャ・ローマ時代の文化を復活させようというごきがイタリアではじまった」と書かれ、中世が引き継いでいたはずの古典古代の文化が、14世紀に「復活」という矛盾を含んだストーリーが生まれてしまっている。こうした叙述になっている背景には、(古典的時代区分への批判から?) 古代と中世の間の連続性を強調しつつも、ルネサンスの説明においては伝統的な「古代の復活」という理解を残してしまったことがあるのだろう。ここでは、現場の教師は、古代と中世、中世とルネサンスの間の時代区分の双方を、伝統的理解とその見直しにまで踏み込んで補足説明しなければならない状況が生まれてしまっている。学校現場において見開き2頁をひとまとまりとして授業を進めることが一般的であることを踏まえるなら、こうした叙述は混乱を招く可能性が高い。また、本書は全体的に他社の教科書よりも資料が少なく、叙述内容も簡素であるため、生徒にヨーロッパ前近代史を十分に理解させるためには、教師には教科書以外にも何点か資料を用意することが求められるものと思われる。時代区分に関しては、ルネサンスにおいて一定の革新があったような記述がみられる一方で、本文中に「近世」の語が現れないため、それ以降も中世が継続しているようにも見える点も指摘しておきたい<sup>38</sup>。ただし、記述巻末の年表においては「西洋」の時代区分の欄も設けられており、1400年頃から16世紀中ごろまでが「中世」と「近世」の変わり目として扱われている。

<sup>38</sup> また、日本史部分も含めた章全体のタイトルは「第3章近世の日本と世界」でありつつ、その直後にあたる「ヨーロッパ世界の形成」の記述の約半分が中世を扱っている点も問題である。

### 3 現行教科書における時代区分とその問題

以上の分析から何が分かるだろう。まず取り上げたいのは、複数の教科書にみられたボッティチェリ「春」である（表1）。「春」はルネサンス絵画の代表として示されているものと思われるが、その提示の仕方には教科書ごとに細かい違いがあった。教育出版は「中世の三美神」と「春」を対比させる形で掲載しており、この点は本文における断絶史観的な記述に完全に対応している。東京書籍は「春」の三美神部分のみを拡大したものに「ルネサンス」と付記し、「古代」、「中世」と付記された各時代の三美神の絵と並べて提示していて、中世絵画とルネサンス絵画の違いに加えて、ルネサンスにおける「古代の復興」という要素も読み取らせようとしているようである。ただし、この2社に関しては、これらの絵画の比較から何を読み取るべきかが明言されていないため、その扱いは現場の教師次第ということになる。対照的に、本文中で時代名称に言及していない帝国書院の教科書では、「古代」、「中世」、「ルネサンス」の三美神を比較する部分のキャプションにおいて、「人間的な個性や身体の美しさ」の表現がルネサンス絵画における中世との違いであると明言されている。清水書院は「ルネサンス」の特徴をキャプションで説明しているが、掲載されているのは「春」のみであり、他社のように中世と対比するようなつくりにはなっていない。

三美神の絵について特に取り扱いが難しいと思われるのは、東京書籍の教科書である。教科書別の分析の部分でも述べたように、この教科書は本文が連続説的な記述となっているため、断絶説を強く打ち出す3つの絵画の比較をどのように説明するかについて、教師の力量が大いに試されることとなるためである。特に、この見開き2頁の情報量の多さを考えると、限られた時間の中で連続説的要素と断絶説的要素を適切に解説してやる必要が生じるため、教科書執筆者の意図をくみ取ったうえで生徒を混乱させないような説明をほどこすためには、相当程度入念な準備作業が必要となろう<sup>39</sup>。この教科書においてさらに注意が必要なのは、この見開き2頁

<sup>39</sup> 東京書籍の指導書における授業の「展開例」によると、この部分では「十字軍によってそれまで忘れられていた古代ギリシャ、ローマの文化がヨーロッパに入ってきたことを説明する」べきであるとされている。問題なのは、指導書においても中世とルネサンスの関係が連続説でも断絶説でもない形で曖昧に記述されており、「近世」への言及も一切なく、中世の終わる時期についての説明が完全に欠落している点である。

の冒頭の節が「中世ヨーロッパ」というタイトルで示されており、そのタイトルの真上にポッティチェリ「春」が大きく配置されているという点である。時間の関係などで授業の中で絵画に関する補足説明が省略された場合、各絵画に付記された時代名称や3つの絵画の対比が意味するところに気づくことができない生徒が、教科書の意図とは全く逆に、ポッティチェリ「春」こそが「中世ヨーロッパ」の代表的絵画であると誤解する恐れすらもある。

次に取り上げたいのは、すべての教科書に共通する「ヨーロッパ近世の不在」という問題である。2で扱った教科書の中では、日本文教出版を除く4社がヨーロッパ史に関して「中世」という時代名称に言及していたが、「中世」の終わる時期を本文ないし見出しで明確に示しているのは、断絶史観を強く打ち出す教育出版の教科書のみである<sup>40</sup>。そして、教育出版を含めた5社すべての教科書において、ヨーロッパ史部分の本文や見出しに「近世」という時代名称は一切あらわれない<sup>41</sup>。中世と近代の間に「近世」を置くことが学界における共通理解となつて久しいことを踏まえるなら、教科書が「近世」に言及しない状況は好ましいものとは思えない。

たしかに教育出版、東京書籍、清水書院の教科書に関しては、巻末年表に西洋史における時代区分が「中世」「近世」「近代」といった時代名称とともに記載されている。教科書が年表以外でヨーロッパ「近世」に言及しない理由は判然としないが、教育出版以外の教科書がルネサンスを「中世からの脱却」として提示しない理由は、（イタリア）ルネサンスのみを転換点とみなすブルクハルト的な断絶史観への批判が学界で定着していることを踏まえた結果であろう。巻末年表に西洋史の時代区分を掲載している教科書すべてが、中世と近世の変わり目に幅を持たせているのも、特定の年の特定のできごとをきっかけとして「中世」が終わったという歴史像を採用していないことのあらわれであると理解できる。本文や章・節名において断絶説的歴史観を打ち出している教育出版においても、年表においては、「ルネサンスをも含む一連の変化を通じて中世から近世へと時代が移り変わっていく」という学界の通説に即した穏当な時代区分を提示しているように見える。

<sup>40</sup> 東京書籍と帝国書院が三美神の絵画の部分でのみ「中世」と「ルネサンス」を対照的に示していることについてはすでに指摘したとおりである。

<sup>41</sup> ただし複数の教科書で「近世」は日本史部分の時代名称としては言及されている。なお、同じく5社すべての教科書がフランス革命に言及する部分などで「近代」や「近代世界」、「近代社会」、「近代化」に言及していることにも注目すべきである。

問題は学校現場で教師が、本文中で明言されていない西洋史の時代区分を年表から拾い上げて解説するかどうか、また教科書を手に取った生徒が年表部分にのみあらわれる「近世」の存在に気づくことができるかどうかである。そして現状の教科書の構成をみる限り、授業の中で教師が解説を加えなかった場合には、大多数の生徒は、「ヨーロッパ史においては産業革命・フランス革命前頃までを中世と呼ぶ」と理解してしまう可能性が高いものと思われる<sup>42</sup>。その結果生まれるのは、ルネサンスや宗教改革のみならず、大航海時代や絶対王制なども「中世ヨーロッパ」のできごとであるとみなす歴史像である。

こうした歴史像がもたらす弊害は小さなものではない。例えば、授業を受けてルネサンスや宗教改革に関心を持った生徒が『中世美術』や『中世のキリスト教』といった書物を手にしてしまうことが考えられる。また、中学歴史教科書では、大航海時代以降ヨーロッパが世界に進出していき、日本にも鉄砲とキリスト教を伝えるというストーリーが華々しく描かれており、こうした時代の世界史に関心を持つ生徒も少なくないと思われるが、「近世」という時代名称を教えられていない状態で、彼ら・彼女らが近藤和彦『近世ヨーロッパ』（山川世界史リブレット）のような書籍を手に取ることができるだろうか<sup>43</sup>。歴史学者が最新の研究動向を分かりやすくまとめた良書を刊行しても、それを読むべき読者に届かないという状況が生じかねないのである。こうしたミスマッチの結果、「思っていたのと違う」と感じた生徒が、歴史そのものへの関心を失ってしまうこともあるだろう。そして、高等学校において世界史が必修から外され、フランス革命以降のみを扱う「歴史総合」だけが必修となることで、こうしたミスマッチを解消する機会はますます減少していくこととなる<sup>44</sup>。ベルサイユ宮殿を描いた図版を用いて進められる授業を通じてアンシャン

---

<sup>42</sup> 中学校の現場でどの程度ヨーロッパ史の時代名称に関する解説が行われているのかについては、学校教員や生徒への聞き取り調査でより詳細に明らかにすべきトピックであると思われる。

<sup>43</sup> 近藤も同書において、現行教科書における時代区分の曖昧さ、わかりにくさを極めて正當に指摘し、「本書は『近世』という時代を、歴史の中に、むしろ世界史の中に、しっかり位置づける」と宣言している（4頁）。この点からみても本書は近世ヨーロッパに関心を持った生徒が真っ先に手に取るべき書物であることは間違いない。

<sup>44</sup> 実際には現行の高等学校の歴史教科書においても、時代名称や時代区分はそれほど強調されていないように思われるが、本稿ではこの問題については立ち入らない。

レジーム期に興味を持った生徒が、概説書の『フランス中世史』の巻を購入してしまったり、「中世フランス」の専門家がいるという理由で大学を選んでしまったりといった事態は絶対に避けなくてはならないのである。

## 4 あるべき教科書の姿とは

ここまでで論じてきた現状の中学歴史教科書の多くに共通してみられる問題は、以下の3点にまとめることができる。

- 1) ブルクハルト的歴史像への批判からか、中世の終わりがはっきりしない記述となっており、年表以外で「近世ヨーロッパ」への言及がないため、フランス革命直前頃まで「中世ヨーロッパ」が続いていると誤解されかねないつくりとなっている。
- 2) 適切な解説がない場合、生徒は伝統的な時代区分（ルネサンスまでで中世が終わる）も、現在の学界の通説に即した時代区分（ルネサンスをはじめとする様々な変化によって15-16世紀頃に中世から近世への転換が起こった）も学ぶことができない。
- 3) 現在の教科書を用いながら教師が時代区分を教える場合、伝統的な時代区分を教えるにしても、現在の学界の通説に即した時代区分を教えるにしても、かなりの量の補足説明を施す必要がある。

こうした状況を前にわれわれがとるべき道はいかなるものであろうか。教科書のあり方として考えられるのは、a) 時代区分のありかたについて通説は存在しないという立場から「中世」や「近世」などといった時代名称自体を全廃する、b) 現在の学界の議論を踏まえた時代区分を丁寧に記述する、c) 極端な断絶史観に基づきつつルネサンス以降が「近世」であると記述する、といったあたりであろうか。aは書籍のタイトルなどにおいても時代名称が用いられ続けている現状を考えると正しい方向であるとは思えない。bが理想であるのは間違いないが、中近世ヨーロッパ史に与えられた紙幅及び授業時間の短さと折り合いをつけるのは容易ではないと

思われる。大多数の教科書で古代の終わりから中世ヨーロッパ、ルネサンス、宗教改革が見開き2頁に配置されている状況を踏まえるなら、時代区分のありかたについて丁寧な記述・説明している余裕はないのである。したがって、われわれはcの選択肢を検討する必要がある。

いまさらcのような古びた断絶説に戻るとするのは、時代区分のあり方を議論してきた研究者や、「中世＝暗黒時代」というブルクハルト以来の歴史像の見直しに取り組んできた中世史家たちにとっては噴飯物の所業に見えるかもしれない。cの案が「中世＝暗黒時代」という批判され尽くしたイメージを復活させる方向性を持ったものであり、その点で問題含みであることは否定のしようがない事実である。だが、現状の教科書が、c案よりも正しく中世ヨーロッパのイメージを伝えているとも思えない。個別の教科書分析の部分で示したように、「中世ヨーロッパ」が扱われる見開き2頁に配置された図版の多くはルネサンス以降のものであり、「中世」の三美神はルネサンス絵画の写実性や美の表現を際立たせる役割を与えられているにすぎない。そして、時代区分を明確にしていない現在の教科書ではむしろ、モナリザやダビデ像、ボッティチェリ「春」、(現在の姿の)サン・ピエトロ大聖堂が「中世ヨーロッパ」を代表する作品・建築であると誤解される可能性が高い。美術や建築の分野でルネサンスと中世が明確に区別されている現状を考えるなら、こうした誤解がもたらす弊害は「中世＝暗黒時代」というイメージがもたらす弊害よりもはるかに大きいのではないだろうか。時代区分に「正解」は存在しないが、「古びてはいるが今でも多くの分野で用いられている『通説』」が存在することは間違いないのであり、そうした「通説」を学校教育において学ぶことの重要性は決して否定できないだろう。

ただし、c案を採用するにしても、ルネサンスに続く時代は「近代」ではなく「近世」であるということには必ず触れなくてはならない。「ルネサンス以降は、中世から脱却し、近代を準備する時期として近世と呼ばれる」という1文を入れたうえで、注などの形で「ただルネサンスのみを近世(初期近代)の始まりとみなす歴史像は近年では見直されており…」と補足してやればなお良いだろう<sup>45</sup>。こうす

---

<sup>45</sup> この意味では、現行の教科書の中で、本文中では極端な断絶史観を打ち出しつつ、年表においては中世と近世の転換期に幅を持たせている教育出版のものは、われわれが考えるべき姿にもっとも近いものであるとあって良いかもしれない。

ることで、時間的に余裕があり予備知識も豊富な教師は、この部分を拾い上げて伝統的な時代区分と現在の学界の通説の差違について解説をほどこすことができるし、時間的余裕や予備知識がない場合でも伝統的な時代区分だけは漏らさず生徒に伝えることができる。このような構成になれば、ルネサンス美術や宗教改革、大航海時代や絶対王制が「中世ヨーロッパ」に属すると考える生徒はいなくなるであろう。

この点で示唆的なのは、伝統的なルネサンス観を強固に打ち出し続ける英語圏の教科書記述である。アメリカの高校生向けの教科書<sup>46</sup>は、第1章が「ヨーロッパルネサンスと宗教改革、1300-1600」となっていて、冒頭で中世末期における疫病の流行などに触れた後に、イタリア・ルネサンスの記述が始まっている。その後の叙述においては、中世と対比する形でルネサンスの生活態度が説明されるなど、ルネサンスと中世の断絶が強調された記述がなされている。また、イタリアの優位性を強調する叙述からも、伝統的なルネサンスイメージが用いられ続けていることが読み取れる。大学学部生向けの教科書<sup>47</sup>でも、「ヨーロッパルネサンス」の章で、後期中世ヨーロッパは11-13世紀、ヨーロッパルネサンスは14世紀から16世紀であると叙述されており、明確に中世との断絶を打ち出した時代区分がなされている。また、「キリスト教信仰及び共同体意識への中世的没頭を拒絶して、ルネサンスの思想家はギリシアとローマの作家の作品にみられる個人主義に惹かれた」と述べ、中世が宗教に支配された時代であるとして、ルネサンスにおける個人主義と対比する形の叙述が行われている。以上の例からは、英語圏の教科書レベルの叙述における時代区分に関しては、ブルクハルト以来の伝統的ルネサンス理解が生きていることが読み取れるのである<sup>48</sup>。大学生向けの概説書が伝統的な断絶史観のみを打ち出していることについては賛否両論あろうが、学習の出発点として伝統的な時代区

<sup>46</sup> Roger B. Beck et al., *Modern World history: pattern of interaction*, Evanston, 2007, pp.32-68.

<sup>47</sup> Candice Goucher and Linda Walton, *World History: Journeys from Past to Present* Second Edition, London and New York, 2012, pp.380-387.

84 <sup>48</sup> 他方で、東方との関係やルネサンスにおける女性の位置づけに関する議論を盛り込むなど、最近の研究動向もある程度反映されている。ルネサンスにおける女性の位置づけを巡る議論については、ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化(下)』、93-124頁；樺山紘一『世界の歴史16 ルネサンスと地中海』、232-247頁；バーク『イタリア・ルネサンスの文化と社会』、65-67頁；プロトン『はじめてわかるルネサンス』、94-98頁、234-236頁。

分を教え込むという点については、わが国の歴史教科書においても見習うべき点がある<sup>49</sup>。

## おわりに

以上、本稿では現行の中学社会歴史分野の教科書における中世から近世への移り変わりに関する記述を、特にイタリア・ルネサンスの部分に注目しつつ、批判的に検討してきた。他方で、ここでいくらあるべき教科書の姿を論じたところで、現場の教師には現行の教科書を使う以外の選択肢は与えられていない。「はじめに」でも述べたように、現在の中学社会歴史分野は圧倒的に日本史分野からなりたっており、ヨーロッパ中世・ルネサンス・宗教改革の部分は、西欧が日本史に直接関係している大航海時代・鉄砲伝来の前史としての位置づけしか与えられていない。こうした状況の中、教科書にして2頁-4頁程度を占めるにすぎない部分を教えるための準備作業として、ヨーロッパ中世やルネサンス、宗教改革、さらには時代区分に関する最新の研究動向をすべて把握しておくことを中学校教員に求めるのは現実的ではないだろう。むしろ、現行の教科書を用いる場合に具体的にどの部分を授業の中で強調・補足すべきなのかについての情報発信は、ヨーロッパ中世史家や近世史家の側の任務なのではないだろうか。「歴史総合」必修化により大多数の高校生が中世・近世を学ばなくなる今、中世史家や近世史家が行うべきは、高大連携（だけ）ではなく、中学校における歴史教育との連携なのである。本稿はそのための第一歩という位置づけではあるが、現行の教科書を用いた具体的な授業開発については、今後の課題として残されたままである。

本稿の分析が明らかにしたように、現行の教科書は「(かつての) 通説」の否定に向かう中で時代区分を曖昧にした結果、最新の説も通説も学ぶことが困難な構成になってしまっている<sup>50</sup>。中学校における歴史教育に関心を持ってこなかったヨー

<sup>49</sup> 本稿では英語圏の2点の教科書を参照したにすぎないが、将来的には諸外国における歴史教育のあり方をより網羅的に調査することで、わが国における前近代世界史教育の進むべき道に関してさらなる示唆を得ることも可能であろう。

<sup>50</sup> 現行の教科書の構成は、高等学校における世界史必修化と同時に進められた中学社会歴史分野の日本史中心の内容への転換に伴って生まれたものである。わが国における歴史教育のカリキュラムの変遷と、過去の中学・高校歴史教科書についての分析を行うことで、前近



ロッパ中世史家・近世史家たちにもこうした状況の責任の一端があることは間違いない。そして被害者となるのは常に生徒たちであるということを忘れてはならない。